

和歌山県紀三井寺の近世鰐口

* 日 高 結 友

要 旨

鰐口は寺院の軒先に掛けられ、鼓面を打って使用される梵音具であるが、大小さまざまな法量のもが見られる。小型の作例は、鉦鼓や打楽器のように使用された可能性があり、大型のものは一般的に仏堂正面の軒先に奉懸され、銘記をもつものも多くなる。また、銘記に寺院や神社の再建の経緯を加える例も散見される。このことから、寺社堂復興や大型鰐口の寄進を通して、権力者が民衆や僧侶、神仏にその影響力を示したとも考えられる。

奈良時代の創建と伝える紀三井寺は、西国三十三所観音霊場として、今日なお和歌山県内における屈指の信仰の寺として知られている。

本寺には、仏像・仏画をはじめ優れた仏教美術作品が伝存しているが、本稿では近世期に造られた鰐口四口について紹介し、その製作の背景について銘記をもとに考察する。

キーワード…①鰐口 ②梵音具 ③紀三井寺 ④近世仏具

⑤粉河鑄物師

一、紀三井寺について

紀三井寺は和歌山県和歌山市に所在し、正式には「紀三井山金剛宝寺護国院」という。紀三井寺という名は、紀ノ国にある三つの井戸がある寺という意味で、清浄水・楊柳水・吉祥水の三つの滝が湧き出ることが由来となっている。その開創は、唐僧為光上人が勝地を得て梵宇を建て、観音菩薩の威光を持って世の苦悩を救わんと来朝し、名草山こそが仏法弘通の根本道場になる霊地であるとして、宝亀元年（七七〇）に本尊十一面観音を刻み、安置する一字を開いたこととされる^①。為光上人の事績には不明も多く、寺伝をそのまま認めることは出来ないが、現本尊・十一面観音像の制作時期は十世紀をそれほど下るものではないとされ、これを本寺草創の下限として考えることが可能かと思われる^②。

為光上人の死後は、堂舎の破損を修復し、維持を行うための勧進を行う穀屋坊により管理される。穀屋坊は一山寺院の正式な構成員とし

ては認められない「聖」と呼ばれる僧の活動拠点であり、勧進や配礼を通して民衆と結びつき、時に朝廷や公家・武家など時の有力者とも関係を持つ、一山寺院と民衆、権力を結び付ける存在であった。『穀屋坊文書』によると、紀三井寺の穀屋坊は比丘尼により成り立ち、天正十四年（一五八六）に本願坊を建立し、為光上人以降初めての僧侶となったと伝わる林良純も穀屋坊の一員であった。³ 紀三井寺穀屋坊は元々境内にあったが、後に仁王門下に移され、宝暦三年（一七五三）には穀屋寺として紀三井寺と本末関係を結んでいた。⁴

古くより紀三井寺に信仰が集まっていたことは、西国三十三所観音巡礼の記録からも確認出来る。観音巡礼は平安時代末に盛んになったとされるが、紀三井寺は比較的初期からその名が記録の中に見える。⁵

西国三十三所観音巡礼は、室町時代には民衆にも広まり、江戸時代に入ると最盛期を迎える。当初は修行として参詣する者も多かったが、やがて観光旅行的な意味合いも有し始める。紀三井寺は江戸時代に入ってから第二番札所として、西国巡りの起点のひとつとなっている。⁶

つまり紀三井寺は観音霊場として、修行僧から一般参詣者まで広く知られ、平安時代から江戸時代まで長く親しまれてきたということである。

民衆に広く長く信仰され親しまれてきた紀三井寺であるが、では紀伊国内の権力者との関係はどうであったのだろうか。

『和歌山市史』によると、紀三井寺は紀伊国名草郡で最高の宗教的権威を誇っていた日前宮とそれを奉祭する紀伊国造と深い関係にあっ

たとある。紀三井寺の立地する名草山は、日前宮の神領内の南側に位置する縁の地であった。それに加え、南北朝時代の第五七代紀伊国造紀俊文の遺した和歌からは、日前宮にとつて名草山は神のよります神奈備山であるという思いがあったことが推察できる。また、歴代の紀伊国造の中に隠居後に紀三井寺に住した者がおり、紀伊国造と紀三井寺とは非常に緊密な関係を持っていたとされる。紀伊国造家は高僧叡尊を紀伊国に招請した際にも、叡尊を招く最初の寺院として紀三井寺を選定しており、紀三井寺に対して強い影響力を持っていたことがよくわかる。三十三所観音巡礼の盛行に伴い紀三井寺も隆盛を極めるが、その隆盛の陰には紀伊国造家の存在があると考えられる。⁷

天正十三年（一五八五）、紀伊国内にある多数の神社仏寺が豊臣秀吉の紀州攻めにより焼き払われた。秀吉の紀州攻めは紀州支配のために地主的な勢力を有していた寺院の力を削ぐ意味合いも強く、紀三井寺も美濃守秀長の発した「禁制」⁸により安全が保障され焼き討ちそのものは免れていたものの、その寺領を没収されていた。⁹

その後、近世に入り浅井氏や紀州徳川氏の支配がはじまる。浅井氏は紀伊国各地の神社・寺院を非常に丁寧に扱ひ、その復興に力を貸した。¹⁰ また、紀州徳川家の祖、徳川頼宣は寺社に対する信仰心が非常に厚い人物で、彼が再興・修復した寺社も多い。

さらに近世期以降の紀伊国歴代領主からも厚い信仰を寄せられ、浅野幸長や徳川頼宣らに合計二一石の寺領を寄付されるほか、¹¹ 本堂だけでなく鐘楼や多宝塔、楼門などが幾度も改築・修復された。

『紀三井寺略誌』¹³や『和歌山市史』¹³などによれば、中近世期における紀三井寺の主な堂塔の改築・修復は次の通りである。

本堂は、大永二年（一五二二）に僧良真が修理、慶長二年（一五九七）和歌山城城代であった桑山重晴により再建される。慶長六年（一六〇一）には浅井幸長の妻女により再興され、万治二年（一六五九）に再び修理の手が入る。また、宝暦九年（一七五九）にも紀州徳川家の勢威に掛け再建された¹⁴、これが現在の本堂である。

楼門は、永正六年（一五〇九）に再建され、永禄二年（一五五九）に修理と伝わるが、その後にも幾度か修復がなされ、細部に桃山時代以降の建築様式が見られる。安永三年（一七七四）に半解体程度の大修理を行い¹⁵、天明二年（一七八二）にも加修された。

鐘楼は、天正十六年（一五八八）に阿部太郎により再建、天明元年（一七八一）に加修される。また『西国三十三所巡拝通誌』上巻によると、寛永十七年（一六四〇）には徳川頼宣が梵鐘を改鑄せしめて寄進し、寛政十二年（一八〇〇）にも大修理を行っている¹⁶。

多宝塔は、文安六年（一四四九）に建立し、その後承応二年（一六五三）、享保七十八年（一七二二）一七二三）、天明三年（一七八三）に加修される。特に享保年間の修復は解体を行うほど大きな修理であったようである¹⁷。

二、紀三井寺に伝存する近世鰐口

今回調査を行った鰐口四口をそれぞれ個別に取り上げ報告する（各部位の詳細な法量については表1を参照）。これらの鰐口は本堂正面に東から西にかけて並べて掛けられていた。記録には各鰐口の掛けられた位置と平成元年十二月二十二日に取り外したことが記される。本稿では製作年代順に報告する。

① 延宝七年（一六七九）銘鰐口

総幅五八・一センチ、鼓面径五〇・〇センチ、総厚一七・六センチを測り、一般的な鰐口¹⁸と比べてもかなり大振りな作例である（写真1）。

表裏面ともに別型を用意して鑄造する、いわゆる両面式鑄造で製作されている。表裏同文で、鼓面は内側より二条・子持三条・二条の線で分け、表面の銘帯に銘文を陰刻し、火焰宝珠を陽鑄している（写真2）。撞座は単弁（素弁）八葉蓮華文で、花卉は八望星のよう



写真1 延宝七年銘鰐口



写真2 延宝七年銘鰐口 (火焰宝珠)



写真3 延宝七年銘鰐口 (撞座)



写真4 宝暦十三年銘鰐口



写真5 宝暦十三年銘鰐口 (火焰宝珠)

に蓮弁の輪郭線だけを表し、花脈は施さない。放射状の葉を表し、蓮子は中央の一つを取り囲むように六つ配す(写真3)。
肩部分には破損による穴が開いている。目はほぼ真横に突出し、張り出しも比較的大きい。さらに口も大きく開き、耳は半円形である。
銘文は以下の通りである。

奉寄進鰐口一磬延寶七巳 未歳五月吉祥月 (右廻り)
所願成就皆令満足之所此施主人數五拾士 (左廻り)

本鰐口は延宝七年(一六七九)五月に紀三井寺本堂に寄進されたもので、本稿で報告する作例の中では最も古い紀年銘を持つ。本寺の諸堂宇の復興・整備が行われていた時期とほぼ重なっており、本品も紀

伊国全体で興った寺社堂復興の動きに合わせて製作されたものと考え、て良いであろう。

施主は、個人名ではなく人数のみが記される。愛甲昇寛氏の労作である「鰐口の銘文」¹⁹⁾を参照すると、多くの作例が施主に関して個人名を明記するのであるが、本品のように集団の全体人数を記録するのは珍しく、数例みられる程度である。

② 宝暦十三年(一七六三) 銘鰐口

法量は総幅五八・五センチ、鼓面径五〇・五センチ、総厚一七・〇センチで、先述した鰐口①と全体の法量が同程度になるように製作されている(写真4)。それだけでなく耳の形状や、鼓面の区分けの比率、目と唇の張り出し方など細部に至るまで鰐口①の形式に近い。

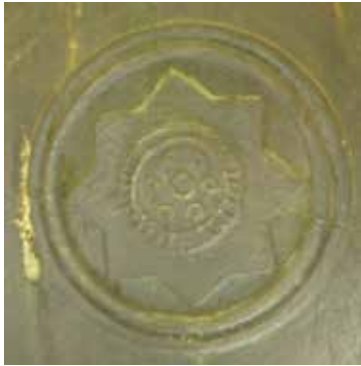


写真6 宝暦十三年銘鰐口（撞座）



写真7 無銘鰐口



写真8 無銘鰐口（撞座）

本品は無銘で、いつ頃の製作かは決め難い。しかし耳の形状が先述の鰐口二口とよく似た半円形をしていることや保存の状態から、江戸時代の作と推測出来る（写真7）。

総幅三二・六センチ、鼓面径二九・一センチ、総厚一〇・三センチを測り、一

両面式鑄造で製作され、表裏同文で、目はほぼ真横に張り出し、口は大きく開き、耳は半円形である。圏線は二条・子持三条・二条の線で表され、銘帯に銘文を陰刻し、火焰宝珠（写真5）を陽鑄する。ただし、火焰宝珠の火焰部は宝珠から浮遊し、火の玉状に表されている。また、撞座の文様は鰐口①の文様と酷似する単弁（素弁）八葉蓮華文で（写真6）、細部に至るまで基本的に鰐口①の造形に合わせて製作されたと推察できる。

銘文は以下の通りである。

宝暦十三癸未年六月吉且令冶鑄之以奉鉤子紀三井山觀世音宝前

現住法印方常誌（右廻り）

冶工弱山森屋長左衛門但此内地金二貫目并細工手間寄進焉（左廻り）

③ 無銘鰐口

宝暦十三年（一七六三）は、紀三井寺の本堂が紀州徳川氏により再建された四年後である。したがって本品は、本堂改築に合わせて新鑄されたとみて間違いないであろう。鰐口①と造形が酷似していることを踏まえると、両鰐口を二つ並べて掛けることを想定したと考えられる。

記銘主である「現住法印方常」は、宝暦九年の本堂再建時に住職を務めた九代目紀三井寺住職中興方常（方丈）上人である²⁰。製作者の山森屋長左衛門に関しては、詳らかでない。

一般的な作例よりは大きいが、前作例二口よりは小振りである。耳が半円形であるのは前作例と同様であるが、目はあまり大きく張り出さない。圏線は前作例と同じく内側より二条・子持三条・二条の線で鼓面を分ける。

撞座の文様は複弁八葉蓮華文で、いずれも控えめに間弁を入れる。子房内の蓮子は中央に据える大きい一つを囲うように都合六つ配され、子房の周りは藁を巡らせる(写真8)。

④ 慶応元年(一八六五) 銘鱧口

本作例は銘文により、他所より本寺に移されたものである。施主や製作者だけでなく、当初の奉納地が紀三井寺でなく、後に移されたことが知られる。



写真9 慶応元年銘鱧口 (表面)



写真10 慶応元年銘鱧口 (表面撞座)

総幅三二・〇センチ、鼓面径二五・六センチ、総厚九・五センチで、鱧口③と同程度の法量を持つ。比較的細めながら、張り出しの強い耳が付けられる。両面ともに圏線が内側より二条・子持三条・二条の線である点は他作例と同様である。

両面式鑄造の作例で、表面は撞座に単弁八葉蓮華文を陽鑄し間弁が八葉付く(写真9)。子房は蓮子がなく素文である(写真10)。中区には牡丹文が陽鑄される(写真11)。裏面は、撞座の蓮華文も中区の牡丹文もなく銘文のみである(写真12)。

銘文は以下の通りである。

【表面】

丹生大明神御神前施主庄中(右廻り)

掛 奉

名丹郡山東組矢田山(左廻り)
(弁)

【裏面】

慶応元丑九月吉日 粉川 福井良房作(左廻り)

銘文により丹生神社に奉納されていたことが分かる。『紀伊續風土記』によると、紀伊国名草郡山東荘には丹生神社が二社あり、そのうち一社は荘内にある矢田村の川を隔てた先にある明王寺村に存在する。⁽²⁾伊



写真11 慶応元年銘鰐口（牡丹文）



写真12 慶応元年銘鰐口（裏面）

太祁曾神社の奥院である当社は、城ヶ峰・高嶺山と続く山脈の麓に位置する。⁽²²⁾

もう一社は『紀伊續風土記』等の文献上のみでの確認であるが、矢田村より南六町の位置にある木枕村にあった社である。説明には「山林^(三五)」⁽²³⁾とあり、山中かそれに近い場所に所在していたことが分かる。本鰐口がこれら二社のうちどちらに所在したか分からないが、いずれにしても矢田村のごく近くにあったことになる。

また、いつどのような経緯で紀三井寺に移されることになったかについても現時点では不詳である。製作が幕末の慶応年間であることを勘案すると、近代に入ってから移動と考えるのが自然であろう。明

治初期の神社合祀などが背景にある可能性もあり、今後の課題としたい。

福井良房に関しては『粉河町史』⁽²⁴⁾に詳しい。紀伊国粉河では、戦国時代より粉河鍛冶とよばれる一群の刀鍛冶師が粉河寺僧兵勢力を背景に活動していた。また粉河鍛冶たちは戦国時代より寺院に關係する仏具等の製作もしていたとされる。粉河村内には慶長年間には既に鍛冶町という町名が見えており、「粉河作」と呼ばれる鑄物は刀に限らず仏具や農機具など多岐に渡り残されている。残存数は記録のみで知り得るだけでも四七〇件を超える。

福井家は、江戸時代に粉河村の中で最も活躍したといわれる鑄物師のひとつであり、江戸初期から明治中期にかけて代々「福井良房」の名を襲名して活躍していた。良房は特に江戸中期から後期にかけて数多くの作品を残し、和歌山県立博物館にも良房製作の花生が収蔵される。⁽²⁵⁾

粉河村の鑄物業は、幕末期に入ると地金の入手困難が理由で衰退の途を辿る。明治三年（一八七〇）の調査では粉河村にいる鑄物師は四人であると報告され、この時期には既に粉河鍛冶の多くがその職を失い粉河村の鑄物業の規模は往時に比べ格段に小さくなっていった。慶応元年銘鰐口はちょうどこの衰退期とでもいうべき時期に製作された作例としても貴重である。

三、近世の大型鰐口

鰐口は二〇～三〇センチ前後のものが一般的であるが、近世にはこれを超える法量を持つ大型の作例も各地で散見される。和歌山県那智勝浦町に所在する青岸渡寺には一三六・四センチの法量を持つ巨大な鰐口が存在するし、一〇〇センチには満たないまでも、四〇～八〇センチ程度の人一人で抱えることが困難な大きさの鰐口は、鎌倉以降の作例が報告されている。

では、大型鰐口が製作される背景にはどのような意図があるのだろうか。筆者はこの法量の違いについて、使用用途と寺社堂の再建という二点に着目して考察した。なお、考察を行うにあたり、前掲した愛甲氏の銘文集を参考にさせていただいた。

使用用途

鰐口は神社仏閣の軒先に掛け、参拝者が礼拝をおこなう際に鼓面を打つというのが広く知られる使用法である。しかし参拝時のみ利用されたのかと言えそうではない。時として鉦鼓と同じように使用されることもあった。

例えば、藤田美術館所蔵の木造空也上人立像は鉦架に鰐口と思しき梵音具を掛けている。解説内ではこの梵音具に関し鉦鼓として紹介されているが、両面ともに鼓面が存在することや、横に目の穴を開けて口を開くような裂け目が下側部に存在することなどから、正確には鉦

鼓でなく鰐口であるとすべきであろう。

空也上人のような遊行僧は平安期以降にも存在する。踊念仏を通して念仏信仰を広めた一遍上人はその典型である。つまり、空也上人立像が造られた南北朝から室町時代の間には既に「遊行僧の使用する仏具のイメージ」がほぼ完成していたと思われる。遊行者の持物として鰐口が選ばれるということは、鰐口が鉦や打楽器のように使用されることがあった事実を示すものといえよう。

また、都からは離れた地域の作例になるが、宮崎県総合博物館所蔵の長祿二年（一四五八）銘鰐口は、当初より吊耳を一つしか設けていない珍しい事例で、ここに緒を通し手で吊るして「鉦」のように使用されていたのではないかと推測がされている。鰐口と共に残っていた緒は二つ折り三五・〇センチで耳に括りつけており、手で吊り下げて使用するのに適した長さである。鰐口が鉦鼓のように使用された例として留意したい。

中世期における一般男性の身長を一五五～一六〇センチ程度と仮定し、空也上人立像の画像や『高野大師行状圖畫』『一遍上人絵伝』に描かれる鉦鼓・銅鑼型の仏具の描写から、人が持つ円盤型梵音具の法量を推測すると、おおよそ一七・〇～二八・〇センチ程度と思われる。鉦鼓や銅鑼は片面にしか鼓面がないため、総じて鰐口よりは重量が軽い。遊行用の鰐口の場合には三〇センチ程度が限度となるであろう。したがってそれ以上の法量をもつものは参拝時の奉懸用とする場合が一般的と考えられる。

寺社堂の建立と大型鰐口の奉納

近世期に近づくと、鰐口の銘文に、寺社における堂の建立・再興に関する記録が散見されるようになる。

例えば先述した青岸渡寺の大鰐口の場合では、本堂が再建された天正十八年に豊臣秀吉が奉納したことを記銘している。

秀吉は紀州攻めで寺社勢力の力を削ぐために寺社堂を焼き討ちするが、その一方で『万葉集』以来の和歌に詠まれた名勝の地に惹かれて吹上・和歌浦・藤代などを遊覧しており、和歌に詠まれる著名な寺院にも足を向けていたとされる³⁴。青岸渡寺は西国三十三所観音霊場第一番札所であり、秀吉自身が堂宇の再建を命じたことから強く惹きつけられた場所であったのであろう。その地に名を刻むべく大型鰐口を寄進したというのは想像に難くない。

銘文は次の通りである。

奉寄進熊野山如意輪堂鰐口 右那智山鰐口久退轉訖夫神以莊嚴

増威人依神光満願急念再興之懇念聲動佛意 含識結信心

之縁依万代不朽之丹誠為子孫長久息災延命奉鑄冶之處如件

天正十八年癸卯月日 豊臣朝臣関白殿下太政大臣秀吉敬

荒廃した那智山を再興したこの懇念な心を鰐口の聲に載せて観音菩薩に伝え、この縁に依り、万代不朽の誠意を尽くすことで子孫が長く息災に長生きするよう願う秀吉の願意から、青岸渡寺を再興した秀吉

自身とその子孫が観音菩薩の加護を受けるに相応しい存在であるという意識がみえる。

また「聲動佛意」とあるように、鰐口の音は観音菩薩に自らの行いを伝える重要な役目を担うという。青岸渡寺に奉じられた日本一の大鰐口は、秀吉自身が持つ青岸渡寺への畏敬の念や信仰心、彼の抱く未来永劫の子孫繁栄の願いを確かに観音菩薩へと伝えようとする強い意志のもと、より大きくより聲を響かせられるように製作された、ということである。

また他にも秀吉の天下統一後には、鰐口の法量が大型か小型かに拘わらず、豊臣家、特に秀頼が寺院の再建や鰐口の施入に関与した記録が多く残されている。豊臣家の再建・施入に関する記録が遺る主な事例として、太宰府市・太宰府天満宮（豊臣朝臣広門）、滋賀県伊香郡木之本町・淨信寺（秀頼公御建立）、和歌山県那智勝浦町・那智大社（豊臣朝臣秀頼公御寄附）、宝塚市長尾・中山寺（秀頼御造営）などがあげられる³⁶。

鰐口は軒先に掛けられる性質上、寺社堂完成時かそれ以降に奉掛される。そのことから鰐口の奉納には、寺社堂の完成を象徴し、復興者の名を留める記念碑的な意図もあったと推測できる。また大型鰐口を奉納するということは、端的に寄進者の財力を示すことに繋がる³⁷。いわば武士の権威主義的意識の強い反映も考慮してよいであろう。特に天下統一以降は、秀吉の紀州攻略時の背景が強く反映されたのではないだろうか。

寛文五年(一六六五)には、江戸幕府が「諸宗寺院法度」を制定する。吉井敏幸氏によると、幕府による一山寺院に対する政策は、①新規寺院・法会の創設禁止、徳川家への祈禱を強制する、②寺院内の僧侶の上下関係を確立し、寺院間でも本寺を優位とする本末関係を確立する、③勸進活動を制限し公的化するという三点が基本であるとされている。氏によると、戦国期には年貢収納が困難になったことや寺内の秩序が混乱したことで寺内の中心となった僧集団の勢力が後退する一方で、寺内で正式な構成員として認められず勸進運動によって成り立っていた聖集団は、政治的変動の中でも大きな打撃は受けず、堂舎の再建・修復を通して次第に寺内での地位を高めていったという。そこで幕府は正式な構成員ではない聖集団を寺内最下層の僧侶として分離し、勸進活動を制限することで弱体化・消滅化させた。勸進活動を制限し、日常的な維持費や修理造営費は朱印料や公儀寄付金を使い、それでも不足する場合には公認の観化・開帳で賄うという幕府の方針は、聖集団や寺社勢力が自らで財力を蓄えることを阻止し、一山寺院の勢力を削いでいったという⁸⁾。

紀三井寺穀屋坊が穀屋寺として境内の外へと移転され、紀三井寺の末寺として本末関係を結ばれたことも、勸進聖が長期にわたって紀三井寺を管理していた事実から、この間の事情をよく反映したものである。

幕府は寺社堂復興による勢力の復活を恐れ、武士階級による支配を覆されないよう、寺社勢力の財政を圧迫しつつ寺社堂の復興業や大型

表1 紀三井寺鯛口・各部位法量 (cm)

	総幅	鼓面径	中区径 (外)	中区径 (内)	撞座区径 (外)	撞座区径 (内)
延寶七年銘	58.1	50.0	31.8	26.5	14.8	11.5
宝曆十三年銘	58.5	50.5	32.6	26.3	14.5	11.4
無銘	32.6	29.1	19.8	16.7	9.5	8.5
慶応元年銘	32.0	25.6	19.2	16.3	10.2	8.1
	撞座径	総厚	縁厚	右目高さ	左目高さ	---
延寶七年銘	10.9	17.6	11.7	3.5	3.8	---
宝曆十三年銘	10.0	17.0	12.9	4.0	4.1	---
無銘	5.2	10.3	5.1	1.2	1.2	---
慶応元年銘	6.7	9.5	6.5	2.2	---	---
	右耳高さ	左耳高さ	耳横幅	唇厚	唇の出	---
延寶七年銘	7.5	7.5	12.5	5.5	2.1	---
宝曆十三年銘	8.5	8.7	13.0	7.2	2.2	---
無銘	4.0	4.0	6.5	3.2	0.9	---
慶応元年銘	4.8	---	7.0	4.5	1.0	---

鰐口の寄進によって財政力を誇示することで、僧侶や民衆、神仏に対して武士階級の権威を顕在化させるのである。

【注】

- (1) 宮本不空『紀三井寺略誌』紀三井寺事務所、一九五〇年、一一三、八—一九頁。
- (2) 和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』第一巻、和歌山県、一九九一年、七九七頁。
- (3) 注(1) 書、六頁。
- (4) 吉井敏幸「近世初期一山寺院の寺僧集団」、『日本史研究』二六六号、一九八四年、五三一—五七四、五七頁。
- (5) 和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』第四巻(和歌山県、一九七七年、三三三—三三五頁)によると、園城寺の僧らが遺した三十三所巡礼の記録に、紀三井寺の名が表れる。保延元年(一一三五)没とされる僧行尊の「観音霊所三十三所巡礼記」の五番目と、応保元年(一一六一)に僧覚忠によって記された「三十三所巡礼則記」の二番目に、寺の正式名称である金剛宝寺と通称である紀三井寺の名が綴られる。
- (6) 和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』第二巻、和歌山県、一九八九年、三五七頁。
- (7) 注(2) 書、七九七—八〇一頁。
- (8) 注(5) 書、一一〇四頁。また『紀三井寺略誌』には禁制が出た経緯が記される。
- 「天正十三年三月の頃豊臣秀吉紀州征伐の軍を起し根来、粉河の諸大寺を焼き、太田城を水征めにしつつ当山に迫った、穀屋の春子と云う者観世音菩薩の御加護を頂き当山守護の一心より大胆にも単身美濃守秀長の陣に至り焼討禁札を貰って此の厄災を免れ僧兵は野に下って皆実業に就いた」
- (9) 注(2) 書、一〇七—二頁。
- (10) 注(6) 書、九一—九五頁。
- (11) 堀内信編『南紀徳川史』第十六冊、清文堂出版、一九三三年、五一—九頁。なお、本文中にある「南龍公」とは徳川頼宣のことを指す。
- (12) 注(1) 書、二〇—二三頁。
- (13) 注(2) 書、一〇八五—一〇八七頁。
- (14) 注(2) 書、一〇八六—一〇八七頁。
- (15) 和歌山県文化財センター編『重要文化財護国院多宝塔、鐘楼、楼門修理工事報告書』護国院、二〇〇八年、七頁。安永年間の修理についての記述が見られたのは本報告書のみである。
- (16) 梅原忠治郎『西国三十三所巡拝通誌』上巻、梅原書店、一九三七年、四三頁。
- (17) 注(15) 書、六頁。天明年間の修理についての記述が見られたのは本報告書のみである。
- (18) 香取忠彦「梵首具」(石田茂作監修『新版仏教考古学講座』第五巻 仏具、雄山閣出版、一九七六年、九八頁)によると、「一般には二〇—三〇センチのものが多い」とある。
- (19) 愛甲昇寛「鰐口の銘文(一)〜(十六)」『史迹と美術』(七八)六・七・八・九号、七九(一・三・五・八・九・一〇)号、八〇(二・七・九)号、八一(三・九)号、八二(二)号、二〇〇八年—二〇一二年。
- (20) 注(1) 書、七頁。
- (21) 『紀伊續風土記』第一輯、巖南堂書店、一九一〇年、三六九—三七七頁。
- (22) 大阪人文社編集部編『和歌山県広域道路地図・便利で見やすいメッシュ方式』(広域道路地図シリーズ二二二)、大阪人文社、一九九七年、図表

- 番号二一。
- (23) 注(21) 書、三七二頁。
- (24) 粉河町史編纂委員会『粉河町史』第一巻、粉河町、二〇〇三年、五五六一五六六頁。
- (25) 『粉河作花生—文化遺産オンライン』
(<https://bunkaninac.jp/heritages/detail/86176>)
最終閲覧日二〇一九年八月十八日。
- (26) 注(24) 書、五六六頁。
- (27) 奈良国立博物館「特別展国宝の殿堂 藤田美術館展 曜変天茶碗と仏教美術のきらめき」、二〇一九年、二二二—二二三頁。
- (28) 永井哲夫「日向における在銘鰐口覚書—中世文化財の史的考察その二—」『研究紀要』No.2、宮崎県総合博物館、一九七三年、三七頁。
- (29) 鈴木隆雄「日本人のからだ—健康・身体データ集—」朝倉書店、一九九六年、一〇頁、表一・六。
- (30) 注(26) 書、一〇七頁。
- (31) 山本智教・真鍋俊照『高野大師行状圖畫』大法輪閣美術部、一九九〇年、六五—六六頁「大師御入壇事」、九四—九五頁「高雄灌頂事」。
- (32) 小松茂美編『一遍上人絵伝』(『日本絵巻大成』別巻)、中央公論社、一九七八年、一六四—一六五頁「地藏堂における踊り念仏」、一八〇頁「念仏踊りに夢中の僧たち」、一九四—一九五頁「空也上人の遺跡市屋の道場」、二三八頁「上野の踊屋」。
- (33) 小型鰐口が鉦のように使用されたとすると、鰐口と鉦鼓の利用法を更に掘り下げること、その成り立ちを理解できるかもしれない。本稿内では深く言及しないが、今後の研究課題とする。
- (34) 注(2) 書、一〇七—一〇七三頁。
- (35) 注(19) 書(「鰐口の銘文(十五)」)、三〇一頁。
- (36) 注(19) 書(「鰐口の銘文(十六)」)、五三—五四頁より、豊臣家に関する記録は、以下の通り。
- 太宰府天満宮(番号 一一一四)
「留守大鳥居権別当法印信寛願主筑紫上野介豊臣朝臣広門」
浄信寺(番号 一一一七)
「近江伊香郡木本地藏堂長祈山浄信寺鰐口 秀頼公御建立」
那智大社(番号 一一一八)
「豊臣朝臣秀頼公御寄附 御奉行鈴木興作」
中山寺(番号 一一三四)
「仲山寺太子堂 秀頼卿 御造営 御奉行建部 壽得」
- (37) なお近世期以前の鰐口の奉納については、寺社堂建立についての旨が書かれた作例が非常に少ない。そのため、中世期以前の鰐口の奉納については次の機会に検討したいと思う。
- (38) 注(4) 書、六六—七〇頁。

【謝辞】

筆者は二〇一九年七月二十日に和歌山市教育委員会、和歌山県立博物館および本学による紀三井寺所在の文化財調査に同行を許され、主に工芸の分野において調査を行った。本稿はそのうち鰐口についての報告である。

調査に際し、紀三井寺貫主前田泰道師、和歌山市教育委員会清水梨代氏には格別御協力・御教示を賜りました。ここに記して深甚の謝意を表します。また、稿をなすにあたり、奈良大学教授関根俊一氏の御助言を得ました。あわせて御礼申し上げます。

Summary

The early-modern Temple-gongs (Waniguchi) of Kimii-dera in Wakayama.

Yu HIDAKA

Usually Temple-gong (Waniguchi) is used to hang on temple frontage and strike it. Some Waniguchi have big size, and others have small size. There is a possibility that small-sized one was used like small gong which used in gagaku or percussion. Big-sized one is usually to hang on temple frontage. Some big-sized ones which have inscription increased gradually.

As the early modern period nears, there were some record of reconstruction of temples and shrines in inscription on waniguchi. It is thought that generals showed their influence to people, monks, the gods and Buddha by reconstruction and making big-sized waniguchi

It is thought that Kimii-dera Temple was built in Nara period. Nowadays it is known as one of 33 temples that are visited during the Kansai Kannon Pilgrimage, and one of the most popular temples in Wakayama.

In this temple, there are magnificent Buddhist art works, for example, Buddhist statues and pictures. This report will introduce four Temple-gongs (Waniguchi) which was made in the early modern period and consider the background of making them based on their inscription.

Keyword: ① Waniguchi (temple gong) ②a Buddhist gong ③ Kimii-dera temple
④Buddhist alter fitting ⑤ Casters in Kokawa